

事業内容：防災に関する指導方法等の開発・普及等のための支援事業  
 学校防災アドバイザー活用事業の実施

題 名：命の大切さを考える防災教育公開事業（帰宅困難・引き渡し）  
 —自他の命を守る防災教育—

～状況に応じ、自ら考え判断する態度の育成をとおして～

所属・電話番号：習志野市立袖ヶ浦西小学校・047-451-2423

校長 岡野 隆

### 1 実施事業

(1) 防災に関する指導方法等の開発・普及等のための支援事業の実施

(2) 学校防災アドバイザー活用事業の実施

### 2 事業概要

(1) 学校と保護者参加による引き渡し訓練を実施し、課題を明確にした上で、より効果的な防災マニュアルを作成する。さらに、地域住民及び関係諸機関も参加する合同防災訓練を実施し、帰宅困難の場合を想定した対応方法の定着を目指す。

(2) 防災教育に関する講演会や研修会及び授業の公開を行い、児童が自他の命を守るための防災教育や地域住民及び関係諸機関との効率的な連携を目指した防災教育の在り方を追究する。

### 3 実施概要

実施時期	計 画 事 項	参加者
5月	○避難訓練及び引き渡し訓練 ・大地震想定	児童 保護者 学校職員
	○第1回担当者連絡会議 ・取組内容の検討	行政・地域住民 保護者・学校職員 の各担当者
6月	○防災教育講演会	講師・児童・地域住民・保護者 学校職員

実施時期	計 画 事 項	参加者
7月	○防災教育研修会① ・北海道教育大教授	全体講師 学校職員
8月	○防災教育研修会② ・元防衛大学校教授	防災アドバイザー・学校職員
9月	○総合防災訓練 ・避難所開設	行政・児童・地域住民・保護者 学校職員
10月	○避難訓練 ・火災発生想定	児童・保護者 学校職員
11月	○防災教育公開授業 ・全学級授業展開 ○防災教育講演会	行政・児童・地域住民・保護者 学校職員

### 4 担当者連絡会議

	氏名	所属及び役職
1	高梨 賢次	県教育庁葛南教育事務所指導主事
2	笹生 康世	習志野市教育委員会管理主事
3	石津谷 治法	習志野市教育委員会指導主事
4	千葉 広之	習志野市危機管理課副主査
5	佐藤 志郎	袖ヶ浦団地自治会会長
6	葛岡 篤	袖ヶ浦団地自治会副会長・鹿の会会長
7	市村 勉	子どもを守る会会長
8	越智 晃	学校開放管理者
9	三代川 佳子	袖ヶ浦西小学校PTA会長
10	岡野 隆	袖ヶ浦西小学校校長
11	鈴木 清彦	袖ヶ浦西小学校教頭

## 5 具体的な取組

### (1) 避難訓練及び引き渡し訓練

- ① 期日 平成25年5月10日（金）
- ② 災害想定 M7.9 首都直下地震  
津波なし

#### ③ 内容

ア <第一次避難>物が落ちてこない、倒れてこない、移動してこない場所で、身を守って待つ。

イ <第二次避難>地震の揺れが収まった後、避難指示で校庭に避難する。

ウ 避難完了の確認をする。

エ 校庭で待機していた保護者（引き取り者）は、指示があったら引き取る児童が在籍する学級の前に並ぶ。

オ 担任から児童の名前を呼ばれたら、「引き渡しカード」を担任に提出する。

平成25年度引き渡しカード

\_\_\_\_年 組

児童氏名 \_\_\_\_\_

引き取り者氏名 \_\_\_\_\_

児童との関係（ \_\_\_\_\_ ）

連絡先 \_\_\_\_\_

住所： \_\_\_\_\_

電話： \_\_\_\_\_

カ 児童の引き取りが終わったら、児童と一緒に下校する。



### (2) 第1回担当者連絡会議

- ① 期日 平成25年5月31日（金）
- ② 参加者数 9名
- ③ 内容
  - ア 校長あいさつ
  - イ 県教育庁葛南教育事務所からの話
  - ウ 担当者連絡会議構成員の自己紹介
  - エ 事業計画の確認と取組内容の検討



### (3) 防災教育講演会

- ① 期日 平成25年6月8日（土）
- ② 講師 福島県南相馬市立原町第三  
中学校教頭 伊東 敏勝 先生
- ③ 参加者数  
5年生と6年生児童 100名  
保護者を含む地域住民 150名  
関係機関職員 30名

#### ④ 内容

「今、防災教育に求められること」  
～3.11その時、それから～

児童は、津波被害や避難所の映像を真剣に見入り、南相馬の小中学生たちが仮設住宅の集会所を清掃するボランティア活動に感心していた。「この春、屋外での運動会を再開できたのを、地域の人も大変喜んだこと」や「子どもは大人やお年寄りを元気にする力を持っていること」を知った児童は、小学生ができる支援活動などを盛んに質問していた。

#### (4) 防災教育研修会①

- ① 期日 平成 25 年 7 月 25 日 (木)
- ② 講師 北海道教育大学札幌校  
教授 佐々木 貴子 先生
- ③ 対象者 本校教職員と地域住民
- ④ 内容

「これからの防災教育  
～ “いざ” は普段なり～」

##### ア 「自助」としてすべきこと

(ア)家屋の耐震化～昭和 56 年 6 月 1 日  
以前に建築申請許可を受けた家屋(耐  
震診断を)

##### (イ)家庭内の安全

- ・家具等の転倒防止対策をする
- ・高い所に物を置かない(落下防止)
- ・観音開きの扉に鍵をつける
- ・ガラス飛散防止フィルムを貼る
- ・避難通路を考えた配置をする
- ・非常持ち出し袋を用意する

##### (ウ)家族で防災会議

- ・避難場所の確認
- ・連絡の確認(災害用伝言ダイヤル  
171 の活用)
- ・役割の確認
- ・「いざは、普段なり」

##### イ 「共助」としてすべきこと

(ア)地域の防災力を向上させる(自主防  
災組織の設立や活動の見直し)

- ・町内会などへの加入
- ・ご近所付き合い(向こう三軒両隣)
- ・避難訓練への積極的な参加

(イ)災害時要援護者って、誰?(個人情  
報の問題)

- ・妊婦さんや赤ちゃんのいる家庭
- ・高齢で一人では逃げられない人
- ・障がいのある人
- ・外国人

ウ 釜石東中学校の生徒の言葉に学ぶ  
(ア)想定外に対応できる力を身に付ける  
には、普段のことを真剣におこなうこ  
と。普段をしっかりとこそ、大事な  
時に普段以上の力が出せる。これは避  
難訓練だけでなく、何事にも通じる本  
質的なことである。

(イ)大人を信じ、お年寄りを大切にしよ  
う。あるおばあちゃんの「生まれてか  
らずっとあの崖が崩れたことはなかつ  
た」という言葉のお陰で、私たちは救  
われた。長く生きている人の話には、  
絶対に意味と価値がある。

(ウ)語り継ぐことの大切さ。今日ここで  
分かち合ったものを、それぞれがまた  
別の誰かと分かち合い広めていくこと。  
そうやって語り継がれたものがいつか、  
また誰かの命をすくうかもしれない。



演習及び実技においては、講師から  
教えていただいた「ハイゼックスの袋  
を用いた米の炊き方」や「新聞紙を利用  
したスリッパの作り方」を踏まえた  
上で、職員同士が互いに協力し試行錯  
誤ながら取り組んだ。



(5) 防災教育研修会②

① 期日 平成 25 年 8 月 21 日 (水)

② 講師 元防衛大学校教授

太田 清彦 先生

③ 対象者 本校教員

④ 内容

「総合防災訓練と日頃の備えについて」というテーマに基づいた講話。冒頭「凡庸な教師はただしゃべり、少しましな教師は理解させようと説明する。優れた教師は自ら手本を示し、偉大な教師は学ぼうとする心に火を点す。」の格言は研修への意欲を一段と増加することにつながった。

ア はじめに

(ア) 災害を未然に防止することでも、被害を少なくすることはできる。子どもたちの被害を少なくするのは先生の力によるところが大きい。(釜石の事例は、奇跡ではない。教育の成果である！)

(イ) そのために大切なことは災害をイメージした準備と訓練。災害をイメージできるか？

イ 総合防災訓練について

(ア) 先ず、我が身を守る！

(イ) 次に、「自分(自分のクラス)は、大丈夫だよ」と報告！

(ウ) 最後に、子どもたちへの指示は、はっきりと具体的に！

\* 時間の競争をしているのではなく、安全の競争をしているのである！

ウ 災害に備えて、何を準備したら良いのか？

(ア) 先ず、「自分は絶対に助かるんだ！」という強い意志を持つこと。

(イ) 次に、災害について関心を持つこと。

Q 海溝型地震と直下型地震では何が違うのか？

Q 南海トラフ地震と東京湾北部地震とではどちらが怖いのか？

Q 習志野市に予想される津波の高度は、何mぐらいなのか？

(ウ) 最後に、自分で考え、行動するということ。

\* 人には、「正常の偏見」がある。

エ おわりに

(ア) 準備した以上のことはできない。

(イ) 「分かった」だけではダメ。「できるようになる」ことが重要。



(6) 総合防災訓練

① 期日 平成 25 年 9 月 1 日 (日)

② ねらい

・常に災害に対する備えをしておくために、日常から学習や訓練を通して、防災教育に努める。

・災害発生直後の身を守る行動に始まり、袖ヶ浦団地自治会を中心とした安否確認をはじめとする共助の活動、そして、避難所の開設に至るまでの一連の流れについての手順を知る。

・避難所における学校職員の役割及び児童への指導の在り方を身に付ける。

③ 参加者数 児童と教職員約 300 名  
保護者と地域住民約 200 名

- ④ 災害想定 9月1日午前9時00分、東京湾北部を震源とするM7.3の地震（東京湾北部地震）が発生し、習志野市では震度6弱が観測され、市内各地で建物が倒壊し、死傷者が多数出ている。

⑤ 内容

ア 初動対応訓練【9時00分～】

(ア)シェイクアウト訓練「姿勢を低く」「頭の保護」「そのまま1分間じっとする」

(イ)地震火災の予防「火元の確認」「ブレーカーの確認」

(ウ)袖ヶ浦団地自治会を中心とした共助の活動

イ 避難所開設訓練【10時30分ごろ～】

(ア)非常食作り体験

(イ)「新聞紙のスリッパ」作り

(ウ)非常食の運搬と配給

ウ 訓練の振り返り【13時30分～】

「お・か・し・も」は守れたか、避難所（体育館）での行動はどうであったかななどの観点で感想や反省を記入した。



(7) 「命の大切さを考える防災教育公開事業」授業公開

① 期日 平成25年11月11日（月）

② ねらい

・教科等の学習の中で、災害時等の状況に応じ、自ら考え判断する態度を育成し、自他の命を守るための防災意識を高める。

③ 参観者数

保護者を含む地域住民 30名

関係機関職員 110名

④ 内容

ア 授業展開

年組	教科等	単元名
1-1	生活	新聞紙でつくろう
2-1	生活	学校で安全に過ごそう
2-2		
3-1	国語	ぼくらの絵文字大作戦『くらしと絵文字』
4-1	総合	わたしたちの安全なくらしを守るためにわたしたちにできること
4-2		
5-1	算数	単位量あたりの大きさ
5-2		
6-1	総合	守ろう!助けよう!かけがいのない命
6-2		
特別支援 3組	生活単元	大きな地震がおきたら～ぼくたち、わたしたちにできること～

イ 学校だより「防災教育特集」



## 袖西小だより

【家庭数配布】 平成25年度 第13号 (平成25年11月8日発行)

### 防災教育特集 <11日(月)授業公開実施>

本校では、平成25年度 文部科学省スポーツ・青少年局「実践的防災教育総合支援事業委託」千葉県教育委員会「命の大切さを考える防災教育公開事業」の指定モデル校として、年度当初から様々な実践に取り組んできました。

前号(第12号)でもお知らせしましたが、来週の月曜日には全学級で防災に関する授業を公開いたします。授業の後には、体育館において全体会を行います。そこで、北海道教育大学教授の佐々木貴子先生による講演があります。

この講演は保護者の方も受講できますので、ご希望の方は直接、体育館にお越しください。なお、当日は、4時間目まで平常通り、その後の日程は次の通りです。

12:15～13:00…給食
13:05～13:20…清掃
13:25～13:35…掃りの会
13:45～14:30…授業展開
14:50～15:15…全体会
15:20～16:20…講演(保護者受講可)





写真は、防災学習に励む最近の子どもたちの様子です。裏面もご覧ください。



防災学習に意欲的に取り組む児童の紹介と授業公開について保護者への事前案内を踏まえて配布した。なお、保護者の参観は講演のみとした。

## ウ 講演

講師 北海道教育大学教授

佐々木 貴子 先生

「防災の視点を取り入れた教育活動について」

～ “いざ” は普段なり～

(ア) 「災害」は、自然災害（天災）と事故災害（人災）とに大別される。

「災害」とは、「人々の生活（市民生活）の安全や生命、財産が失われること。例え、地震や津波が発生しても、人々の生命や安全が確保され、財産等も失われなければ、それは「災害」ではなく自然現象である。しかし、自然現象が人間の営みとかかわりがあるときに「災害」となる。

(イ) 「防災」とは、公助を原則に、発災後の救命と復旧・復興の対策を重視した法定計画に従う平時の備えや訓練をいう。

(ウ) 「減災」とは、自助・共助を原則に、災害や突発的な事故などは防げないという前提に立ち、被害を受けても最小限にとどめることのできる平時からの備えや訓練などの取り組みをいう。



防災という視点から、私たちの生活を見直すこと、それは大きくいえば、私たちの生き方を問うことにもつながるものと考えられる。

## 6 成果と今後の課題

### 【成果】

- ・自分の命（身）は自分で守ることについて児童の意識がとても高まり、そのためにはどうしたらよいのか考えることができるようになった。また、教師自身が自分の命を守ることの重要性を再認識できた。
- ・日常的な指導を継続することにより児童の防災意識が深まり、身の回りの施設や設備の安全性について鋭い（素直な）視点で見直すようになった。
- ・多くの児童にとってこれまでの震災は人ごとのようであったが、防災への意識が深まることで自分だったらと考えられるようになった。それに伴い、一般論ではなく「袖ヶ浦」という町で、自分はどうか、どうあるべきか、実情に合った防災を考えるようになった。

### 【課題】

- ・実践により明らかになったことを踏まえて既成のマニュアルを見直す。さらに、実情に即した効果的な方法を考え改善を図る。
- ・小学校6年間で目指す児童の姿を明確にすることが重要であり、そのためには、学年の発達段階に応じた必要な内容を吟味し系統性ある防災教育年間指導計画の作成と学校体制の整備が急務である。
- ・家庭への働きかけが不足しているので、学校からの様々な発信により、家庭も巻き込んで防災意識を高める必要がある。
- ・いろいろな場面を想定して計画され、訓練したり、講演会や研修を受けてきたりしたが、やはり積み上げてきたという実感より、こなしてきたという感じが強い。今後も防災への取り組みを積み重ね、日常的に防災の視点をもって生活していくことを心がけなければならない。